令和７年度愛媛県立西条高等学校第１学期始業式式辞（全日制）

皆さん　おはようございます。

昨年度、皆さんは、日ごろから部活動やＳＳＨの探究活動に熱心に取り組み、素晴らしい成果をあげてくれました。その結果、何もしていない私が生徒の皆さんの代わりに、愛媛県知事、文部科学大臣、日本銀行総裁などからたびたび表彰されました。皆さんの大活躍により、西条高校の名が日本中に轟いたことを本当に嬉しく思っています。また、春休みには、野球部、ソフトボール部をはじめ、多くの部活動においても、奮闘してくれました。皆さんのバリバリのパワーには脱帽です。校長として感謝します。

新年度を迎えた皆さんが、新鮮な気持ちで次の学年へと歩み、さまざまなことに、一層ワクワクした気持ちで挑戦してくれることを期待しています。

さて、コロナ感染症が第５類となってから、来月にはまる２年が経とうとしています。感染症拡大の時には、人と会うことを制限しなければならず、日常が奪われ多くの学びの機会が失われ、皆さんも悲しい思いを多くしたことと思います。しかし、私たちは、ウイルスと戦うことで、健康の大切さ、正しい情報を得る大切さ、他者を思いやる気持ちの大切さなど、多くのことを学び、考えさせられました。そのような感染拡大を収束させてくれたのは、女性科学者のカタリン・カリコ博士でした。彼女は、その功績が認められ、ノーベル生理学・医学賞を受賞しています。今日は、人類を救ってくれた彼女の話をしたいと思います。

簡単に説明すると、カリコ博士は、人工的に作った「メッセンジャーＲＮＡ」という遺伝物質を人間の体内に入れ、人間の身体そのものを「医薬品を作り出す工場」にする研究をしました。そしてこの技術により、通常は１０年かかるといわれているワクチンを、コロナワクチンに関してはわずか 11 か月で完成させることができたのです。彼女の研究成果がなければ、私たちは今も新型コロナウイルスに怯える生活をしていたかもしれません。

そんな偉大な功績を残した彼女ですが、その人生の大半は波乱の連続で、屈辱にまみれたものだったそうです。彼女の研究は長い間実現不可能と判断され、変わり者扱いされていたのです。30 歳の誕生日に研究室をクビになり、次の研究室では上司から出世する道を阻まれ再びクビになります。その後もいくつかの研究所を渡り歩き、生まれ育ったハンガリーから、アメリカに渡りました。41 歳で所属したペンシルベニア大学では 17 年間研究を続けましたが、全く評価されず、結局、研究室を追い出された時には、私と同じ 60 歳程になっていたのです。こんな体験をしたら、ほとんどに人はとっくにあきられることでしょう。しかし、彼女は研究を続けました。それによって、理解者は着実に増え、エイズウイルスワクチン研究者のワイスマン博士の協力と、新型コロナウイルス感染症の大流行により、彼女の研究はようやく世界中から注目されるようになったのです。ただの変わり者と思われていたカリコ博士の努力が花開き、ノーベル賞を受賞したのは、彼女が 68 歳の時のことでした

私は、不可能だという思い込みは、挑戦を妨げてしまうと思っています。人生には、周りの人が成功しているのに、自分だけが上手くいっていないと思うことが、よく起こるものです。そんな時、他人を羨んだり、焦ったり、落ち込んだりすることがあるかもしれません。でも、自分が上手くいっていないことを、周りのせいにしても意味がないのです。なぜなら、他人のことや周りの環境というものは、自分が変えられないものだからです。周りのことを気にして落ち込むのはエネルギーの無駄遣いです。そんな時間があるのなら、目的に向かって自分が今何をすべきなのかということに集中しましょう。これが大切なことです。信念があってあきらめることをしなければ、必ず目的を達成することができるのです。

これから夏・秋にかけて運動部や文化部は大会が待っています。その後、３年生は、進路実現に向け、カウントダウンが始まります。時間が過ぎるのは、あっという間です。大丈夫。皆さんならやれるはずです。志を高くし、一日一日を大切に努力していきましょう。皆さんが、大いに羽ばたき活躍してくれることを祈って、式辞とします。